

理学と漢民族村落における宗族と祖先祭祀 福建省北部・樟湖鎮でのフィールド調査を中心

Kinship Groups and Ancestor Worship in Li-hsueh (Rigaku) and the Villages of the Han (Chinese) People: Fieldwork in Zhanghu Town in the Northern Region of Fujian Province

麻 国慶

①研究動機と視点

②調査地の概況

③宗族のルーツ（根）

④祖先崇拜と風水

⑤まとめ

【論文要旨】

中国の歴史上、宋代から始まった宗族復興とこの時期の理学の発展は密接な関係をもっていた。今日においても、理学は民間社会の祖先祭祀と宗族儀礼に対して、かなりの直接的な影響を及ぼしている。本論では、理学発祥地の一つである福建北部の民間社会において、大伝統としての儒教文化、特に理学が民間社会構造と民間信仰に対して影響を与えていていることを検討する。例として、福建北部にある千年の歴史を誇る古い村—樟湖鎮シャンフージエンと、その下位単位であるいくつかの村落のフィールド調査をもとに、宗族の復興とその活動を縦糸とし、絶え間なく創造される文化共同体としての宗族と文化儀礼としての祖先崇拜を横軸として、社会構造や民間文化への理学の影響について説明する。特に現地の家祭、祖厝祭、祠祭、墓祭と墓亭祭などの儀式には、宗族のルーツ（根）としての祖先崇拜構造上の多層性と形式上の多様性を見てとることができる。それと同時に、これらの宗族行事や祖先崇拜の中には、風水の観念が存在すると考えられる。調査地・樟湖鎮の祖先祭祀の場である祖厝、祠堂、祖墓より、この問題を説明することができる。しかも、こうした儀式やその主な機能は、漢民族の社会構造の中に、すでに溶け込んでいるのである。これは理学文化をはじめ、地域文化形成の現実的な反映でもあり、長い時間を経て習俗化するであろうことが約束された文化現象である。最後に、我々が見てきた福建北部の宗族の行事においても、宗族や地域社会が国家とリンクしつつも分離していることを動態的なプロセスとして示している。こうしたプロセスは、宗族が国家と社会の間で最良の結合点を捜し求めようとするプロセスである。